

# 小笠原諸島の欧米系島民に見られる 語アクセントの型およびその世代差

ダニエル・ロング（首都大学東京 人文科学研究科）

磯野 英 治（首都大学東京大学院 人文科学研究科博士前期課程）

塚原 佑 紀（首都大学東京大学院 人文科学研究科博士前期課程）

## 要 約

本論で小笠原諸島の欧米系島民が持つ日本語アクセント体系の実態を記述する。調査した結果、返還前に言語形成期を迎えた中年層と返還後にそれを迎えた若年層との間に顕著な違いが見られた。中年層話者はアクセントの型による単語の意味区別をしない無型アクセントとなっている。一方、若年層のアクセントは東京式アクセントとほぼ一致している。返還前に生まれ育った話者が無型アクセントになっている原因は、英語を母語とする人が日本語を習得したときに類別語彙が完全には習得できなかったことと、一型アクセントとなっている八丈方言を欧米系が耳にしていたこと、の2つが重なったことだと考えられる。世間で言われているような「テレビの影響」によって無型アクセントの話者の「有型化」が起り類別語彙ごとに東京式アクセントを獲得する例は、これまでの研究では実証されておらず、不可能と思われる。むしろ東京など関東地方から島に移り住んで来た多くの東京式アクセント話者と日常的に面と向かってことばを交わしているという言語接触によってアクセントの有型化が起きたのではないかという結論に至る。

## I. 問題の所在

小笠原諸島には欧米系と呼ばれる、日本人以外の先祖をもつ島民がいる。彼らは現在日本語を日常的に使っているが、その日本語には内地の話者とも、小笠原の日系島民とも異なるいくつかの言語的特徴がみられる（ロング・橋本、2005）。本稿では、現在の欧米系島民の日本語に見られる単語アクセントの型（無型であるか有型であるかを含めて）を分析した上で、同じ欧米系島民でも世代によって日本語のアクセントが異なるかどうかを検討し、次のように仮説を立てて検証していく。(1) 現在の中年層の欧米系島民が持つ日本語アクセントには英語の影響が見られるのではないか。(2) 返還後に内地から大量に移り住んで来た日本人と日常的に接触することによって、若い欧米系話者の日本語アクセント

が返還前に育った世代のものとは異なっているのではないか。

小笠原における言語使用・言語接触の歴史をとりあげることが紙幅の関係で本稿ではできないが、いくつかの重要なポイントは抑えておきたい。<sup>1</sup>最初に小笠原諸島に住み着いたのは日本人ではなく、欧米諸国や太平洋諸島からやってきた人々であり、島生まれの二世以降の間では、一種の英語（準クレオール）が話されていた。1870年代に日本人移民が大勢入って来ると在来島民は日本語を使えるようになったが、数十年にわたって英語を身内の言語として維持し、二重言語併用（ダイグロシア）を続けていた。第二次世界大戦前は欧米系島民の間で英語の重要性が減ってきていたが、戦後になると米軍の統治下で英語が復活した。現在の中年層話者は米軍の統治下に育ったために英語を流暢に話せるが、返還後に生まれ育った彼らの子どもは日本語モノリンガルになっている。

## 1. 先行研究

最近まで、小笠原諸島の人々が話す言語を対象とした研究は皆無に近かった。その最大の理由は島の歴史の浅さにある。つまり人間が諸島に住み着いてからまだ180年足らずであり、しかも日本語がそこで使われるようになってからまだ130年あまりで、そうした移民の島では伝統的な言語体系が確立しておらず、従来の言語研究の対象にはなり得ないという認識があった。平山（1941）は次のように述べ、欧米系島民の存在を知っていること、および彼らの日本語を調査する必要性があることを示唆しているながらも、まだその実施には至っていない現状を語っている。

小笠原諸島は八丈の南方遠く浮かぶ群島で、島民移住の歴史もごく新しいのであるが、（大々的移住は明治初年。又「文久二年八月、八丈より男女三十人移民」の記録がある。）父島・母島に生れ、そこに青年期を過した人々のアクセントは一型である。思ふに本島草分け当時、一型地帯（特に八丈島）からの移住者が最も優勢であつたものであらう。

諸地方からの移住者が雑居して今尚、小笠原方言を育むまでに至らず、方言としては八丈等とは大変な相違があり乍ら、アクセントが同じ一型に統合されてゐる事は興味深い現象であらう。（但し臨地して多くの土着の人に就いて仔細に<sup>あまね</sup>遍く調査を試みなければ不安である、当発音にはかなり疑問があつた。）

これ以外に欧米系島民の発音に触れるものとしては、例えば有馬（1985）の『音声の研究』の文書があるが、その音声記号は明らかに正確さに欠けており、音声資料としては価

<sup>1</sup> 小笠原の歴史についてはロング編（2002）を参照されたい。

値が低い。<sup>2</sup> 以下に小笠原で使われている日本語のアクセントに取り組んだ唯一の研究として、阿部（2006）を紹介する。次に無型アクセント地域における有型アクセントの成立に関する堀口純子の一連の研究を紹介する。

### (1) 阿部新の研究

阿部は戦前の話者が話す日本語のアクセントについて次のように述べている（阿部、2006）。

旧島民も欧米系島民も、単語単独の場合と助詞付きの場合とで型が異なっていることが多く、どの類別でも2種類の型しか現れないことが多い。その現れ方は類別ごとの一貫性がない。出現しやすい型の傾向には大きな個人差がある。ただ、欧米系島民の話者Oのように東京式アクセントの型との対応を示す話者もいた。

阿部はこれを「無アクセント」と呼んでいるが、これは納得のいく解釈である。しかし、米軍統治下に生まれ育ったいわゆるNavy世代のアクセントについて納得しがたい結論を出している。彼はそれを「ほぼ尾高一型アクセント的である」と結論付けている（124頁）が、同世代のもう一人の話者の2拍名詞のデータを見ると、どの類においても二つ以上のアクセントを使っていることが分かる。よって、「一型」よりも一貫性のない無型アクセントと解釈した方が妥当であろう。

返還後に生まれ育った（若年層）欧米系話者については語っていないが、返還後の生え抜き話者二人のデータを提示して、（少なくとも2拍名詞に関して言えば）東京式アクセントであることを示している（128頁）。

今回の我々の調査では返還後の欧米系話者および日系の若年層話者のアクセントを調べ、彼らが東京式アクセントになっているという結果を得た。親や祖父母の世代が無型アクセントであれば、彼らはどのようにして東京式アクセントを獲得したのかを説明しなければならない。テレビの影響によって人のアクセント体系が変化するという指摘がたびたび聞かれる（馬瀬、1980）。しかし、現状はこの憶測を裏付けない。例えば、仙台市の若年層が無型アクセントから有型アクセント（東京式）に変化しているという事実はあるが（佐藤、1999；大西、1992）、宮城県下はいまだ無型のままである。都市の人々だけがテレビを見ているとは考えられない。むしろ、面と向かって人と話す効果（言語接触）の影響を考えた方が現実的であろう。

---

2 小笠原諸島の言語に触れるほかの文献はLong（2007:11-15）で概説されている。

後で小笠原においても若年層のアクセントが有型化している原因として、返還後に大量に移住してきた東京式アクセント話者の影響を考えるが、それに先立って堀口純子の研究を紹介したい。

## (2) 堀口純子の研究

堀口(1980,1981,1982)では「無型アクセント地域における有型アクセント(主に東京式アクセント)への移行」について、「親と子」「新旧住民の交流」という観点から、無型アクセント地域在住の住民を対象に、世代・在住地区・在住年数・出身地によるアクセントの比較、考察を行っている。調査は、アンケート調査(被調査者の居住歴・両親の出身地・両親の職業・両親の職場の所在地・買い物をする場所などの質問項目)、読み上げ調査(被調査者に名詞・動詞・形容詞を品詞別、拍数別に整理した単語・文・句を読んでもらい録音)、聞き取り調査(調査者が同一語または同一文を2から3種類のアクセントで発音するのを被調査者に聞いてもらって、内省した自分のアクセントと同じだと思うものを選択)、意識調査(被調査者が、東京式アクセントとの違いを意識しているかどうか、またその違いに影響を受けていると感じているかどうかをアンケートにより調査)といった方法で行われた。

上記の研究で、一般的に考えられているようなテレビやラジオの影響によって「無型アクセントから有型アクセントへの移行」が起こるのではなく、無型アクセント地域に移住してきた有型アクセント話者との言語接触が大きく関わっていることが明らかになった。しかし、上記研究においても少なからずテレビ、ラジオからの影響について言及されている。本研究では「無型アクセントから有型アクセントへの移行」はあくまでも言語接触との相関が高いということを実証的に調査、考察していく。

## 2. 調査概要

東京都小笠原村父島の欧米系島民の高年層・中年層・若年層を対象とし、2007年8月11日から8月19日にかけて調査を行った。調査は調査票を用いたアクセントの聞き取り調査である。助詞「ガ」が付いた2拍名詞の類別語彙を中心に、小笠原特有の地名や人名、形容詞の連体形と終止形、動詞(呼ぶ、読む)の連体形とタ形・テイル形のそれぞれについていくつか語を示し、それを読み上げてもらう方法で行なった。音声はMD・テープに録音し、あとでロング・磯野・塚原がアクセントの確認を行なった。インフォーマントは以下の通り(敬称略)。

高年層(戦前生まれ) 瀬堀ヘンドリック

中年層 (Navy 世代) 上部フローラ、ジョン・ワシントン、セーボレー孝、瀬堀ロッキー

若年層 (返還後生まれ) 上部修一、セーボレー・サーヤ

参考として日系島民 (菊池真彦、高岩和慶) の調査も行なった。なお、本稿で取り上げるのは下線を引いた4人の調査結果である。

## II. 日本語の東京式アクセントの概要

東京式アクセントの二拍名詞の基本的な型は平板型・頭高型・中高型の3つで、音韻論的に重要なのはアクセントの下がり目である。また、それぞれの語はどの型のアクセントで発音されるかが決まっている (徳川、1981；中條、1989)。同じアクセントの型を持っている語のグループをそれぞれ「類」として1類ずつまとめたものを類別語彙と呼ぶが、今回の調査項目も類別語彙に着目して選定した。

名詞のアクセントの型は $n+1$ 種ある ( $n$ は拍数を表す)。例えば、2拍名詞は○●▲と●○△と○●△の3種類がある (△▲は一拍の助詞を、●▲は高く発音される箇所を表す)。単独で発音した場合は同じ型に属す語であっても、一音節の助詞を接続すると区別が生じることがあるからである。例えば、「足」と「味」は単独で発音した場合は○●であるが、助詞「ガ」を接続すると「足が」は○●△となり、「味が」は○●▲となる (徳川、1981)。今回も名詞に助詞「が」を接続した形を調査した。動詞のアクセントの型は2種類で、2拍語では平板型と頭高型、3拍以上の語では平板型と中高型が出現する (中高型の下がり目は原則として最後から2拍目にある)。助詞・助動詞が接続しても、終止形・連体形と同様のアクセントが現れる。形容詞のアクセントは、2拍語には頭高型の1種類しか現れず、3拍以上の語でも平板型と中高型の2種類しか現れない (中高型の下がり目は原則として最後から2拍目にある)。助詞・助動詞が接続しても、終止形・連体形と同様のアクセントが現れる (秋永、1985)。今回の調査では東京式アクセントと比較するために、動詞については連体形とタ形・テイル形を、形容詞については終止形と連体形を調査した。

## III. 中年層 (Navy 世代の) 話者の単語アクセント

米軍の統治下では学校教育は英語で行なわれ、米軍と話す際も英語であった。また戦前から続いていた無型アクセントの日本語を欧米系のこどもが家庭で習得した。欧米系の配偶者の中には有型アクセントを持つ内地生まれの人もいたが、欧米系同士の家庭や小笠原生まれの八丈系の配偶者も多かった。

今回の調査結果で、中年層のインフォーマントが単語によってアクセントを違える場合

表1 世代別アクセント分布図 (表中の記号については本文参照)

調査項目		中年層		若年層		東京式	凡例
		①	②	③	④		
<b>名詞 (1拍+助詞「が」)</b>							
	手が	■	■	■	■	■	■:●○△
	火が	■	■	■	■	■	□:○△
	日が	□	□	■	■	■	□:●○△
	蚊が	□	□	■	■	■	■:○△
	葉が	□	□	■	■	■	■:○△
<b>名詞 (2拍+助詞「が」)</b>							
1類							■:●○△
	鼻が	■	■	■	■	■	◇:○●△
	鈴が	■	□	■	■	■	□:●○△
	端が	■	■	■	■	■	□:●○△
2類							■:●○△ ◇:○●△ □:●○△
	石が	□	■	■	◇	■	
	歌が	□	■	■	■	■	
	音が	□	■	■	■	■	
	夏が	□	■	■	■	■	
	雪が	□	■	■	■	■	
3類							■:●○△ ◇:○●△ □:●○△
	足が	□	■	■	■	■	
	馬が	□	■	■	■	■	
	腕が	□	■	■	■	■	
	色が	□	■	■	■	■	
	花が	□	□	■	■	■	
	波が (一回目)	□	■	■	■	■	
4類							■:●○△ ◇:○●△ □:●○△
	箸が	□	□	■	◇	■	
5類							
	肩が	□	□	■	■	■	
	雨が	□	□	■	■	■	
	秋が	□	□	■	■	■	
	夜が	□	□	■	■	■	
4類 (追加項目)							■:●○△ ◇:○●△ □:●○△
	船が	□	◇	■	■	■	
	海が	◇	■	■	■	■	
	亀が	◇	■	■	■	■	
3類 (追加項目)							■:●○△ □:○●△ ◇:●○△
	塩が	■	□	■	■	■	
	潮が	□	■	■	■	■	
	麩が	■	■	■	◇	■	
	波が (二回目)	■	◇	■	■	■	
<b>名詞 (3拍+助詞)</b>							
	カラスが	□	□	■	■	■	■:●○△
	タマナの	◇	◇	■	■	■	◇:○●△
	葉が	■	■	■	■	■	■:○●●△
	あかばが	■	◇	■	■	■	◇:○●●△
	小豆が	□	□	■	□	■	■:○●●△
	頭が	□	□	■	■	■	□:○●●△
	鏡が	□	□	■	■	■	□:○●●△
<b>名詞 (4拍+助詞「が」)</b>							
							- 資料なし
	こうもりが	■	■	☆	☆	☆	■:○●●●△
	のみものが	■	■	▽	◇	▽	□:○●●●△
	みずうみが	■	■	◇	◇	◇	◇:○●●○△
	いもうとが	□	■	□	□	□	▽:○●○△
	おはなみが	■	-	■	■	■	☆:●○●○△
<b>固有語</b>							
	グリーンベベ	■	■	□	□	□	□:○●●●●○
							■:○●●●●●
<b>複合名詞</b>							
	小笠原小学校が	□	■	□	□	□	□:○●●●●●○△
							■:○●●●●●●●△

ロング・磯野・塚原：小笠原諸島の欧米系島民に見られる語アクセントの型およびその世代差

表1つづき

調査項目	中年層		若年層		東京式	凡例
	①	②	③	④		
<b>形容詞 (3拍形容詞)</b>						
赤い (服)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	■: ●●● □: ○○○
(服が) 赤い	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	
厚い (本)	<input checked="" type="checkbox"/>					
(本が) 厚い	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	
暑い (部屋の中)	<input checked="" type="checkbox"/>					
(家の中が) 暑い	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	
薄い (皮)	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	
(皮が) 薄い	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	
白い (服)	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	□: ○●●
(服が) 白い	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	■: ○○○
<b>形容詞(2拍形容詞)</b>						
(金が) 無い	<input checked="" type="checkbox"/>	■□: ●○				
<b>動詞 (2拍動詞・連体形)</b>						
泣く (人)	<input type="checkbox"/>	□: ○●				
読む (人)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	■: ○○
切る (人)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	
<b>動詞 (3拍動詞・連体形)</b>						
動く (人)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	■: ○○○
						□: ○●●
<b>動詞 (タ形)</b>						
泣いた (人)	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	■: ●○○
呼んだ (人)	<input type="checkbox"/>	□: ○●●				
読んだ (人)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	
<b>動詞 (テイル形)</b>						
読んでる (人)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	□: ○●●●
呼んでる (人)	<input type="checkbox"/>	■: ●○○○				
<b>地名 (3拍)</b>						
コベベ	◆	■	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	□: ●○○
清瀬 (きよせ)	■	■	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	◆: ○●○
						■: ○●●
<b>地名 (3拍)</b>						
ケータに	■	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	□: ●○○△
						■: ○●●▲
<b>地名 (4拍)</b>						
小港 (こみなと)	■	<input type="checkbox"/>	◇	◇	◇	□: ○●●●
奥村 (おくむら)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	◇	◇	◇	◇: ○●○○
大村 (おおむら)	<input type="checkbox"/>	■: ○●●●				
前浜 (まえはま)	<input type="checkbox"/>					
<b>地名 (4拍) + 助詞「に」</b>						
父島 (ちちじま) に	<input type="checkbox"/>	□: ○●●●▲				
母島 (ははじま) に	<input type="checkbox"/>					
兄島 (あにじま) に	<input type="checkbox"/>					
<b>地名 (5拍)</b>						
宮之浜 (みやのはま)	■	■	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	□: ○●●○○
						■: ○●●●●
<b>地名 (6拍)</b>						
キャベツビーチ	<input type="checkbox"/>	■	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	□: ○●●○○○
タマナビーチ	<input type="checkbox"/>	■: ○●●●●●				
ジニービーチ	<input type="checkbox"/>					
<b>地名 (6拍 + 助詞「に」)</b>						
弟島 (おとうとじま) に	<input type="checkbox"/>	□: ○●●●●●▲				
<b>地名 (7拍)</b>						
コベベ海岸	<input type="checkbox"/>	■	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	□: ○●●●●○○
						■: ○●●●●●●●
<b>人名 (3拍)</b>						
上部 (うわべ)	◇	■	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	□: ●○○
瀬堀 (せほり)	<input type="checkbox"/>	◇: ○●●				
菊池 (きくち)	◇	■	◇	◇	◇	■: ○●○
<b>人名 (4拍)</b>						
浅沼 (あさぬま)	■	◆	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	□: ○●●●
						■: ○●●○
						◆: ○●○○
<b>人名 (5拍)</b>						
ワシントン	■	■	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	□: ○●○○○
セーボレー	◇	◆	◇	◇	◇	◇: ●○○○○
						◆: ●●○○○
						■: ○●●●○

※ 三角は一拍の助詞、黒い記号は高く発音される拍を示す。

もあったが、それはほとんど恣意的に変えていたようである。調査時にこれを象徴するできごとがあった。表1の②のインフォーマントの2拍名詞のデータを見よう。一類の「鼻が」と「端が」を平板で発音しているので、東京式アクセントを持っているのではないかと調査者には思われた。「飴が」を（東京式の平板と異なる）頭高アクセントで読んでいたが、これは例外的なものかとも考えた。二類に入ると「石が」「歌が」「音が」「夏が」「雪が」を、そして三類の「足が」「馬が」「腕が」「色が」をすべて中高で発音していた。やはり東京式だと調査時に感じていた。ところが表1で分かるように、同じ三類なのに「花が」と「波が」を平板で発音した。続いて4類の「箸が」と5類の「肩が」「雨が」「秋が」「夜が」を全部同じように一貫して平板で発音した。どうしてそこでアクセントを切り替えたかと言うと、「色が」と「花が」の間で、（インフォーマントに見てもらっていた）調査票の頁をめくったのである。類別によってアクセントを切り替えたのではなく、頁をめくったらアクセントを変えたのである。また同じ単語でも、調査票の違う場所に2回出てきたらそれを違うアクセントで発音している単語があった。表1に載っている一類から五類の2拍名詞は、調査時において表に載っている順番で発音してもらったが、「追加項目」と記しているのは調査時に順不同で発音してもらっている。このインフォーマントが二回目に発音した「波が」は平板ではなく、頭高であった。

現在、中年層となっているNavy世代の欧米系島民は日本語を話すときに高低アクセントで単語の意味区別をせずに、無型アクセントで話していると言える。

#### IV. 若年層話者の単語アクセント

調査の結果、Navy世代（中年層）と若年層ではアクセントに違いがみられ、若年層のアクセントは名詞、動詞、地名、人名では拍数に関わらずほぼ東京式アクセントになっていることが分かった。しかし、3拍の形容詞については個人差・揺れが目立つ。本アクセント調査の結果を分布図として下記するとともに、世代によるアクセントの違いの要因については、「V. 考察」で詳述する。

#### V. 考察

戦前生まれの欧米系話者のアクセントは、本稿でデータを取り上げていないが、先行研究からも分かるように、無型アクセントの人が多かった。この原因は2通りであったと考えられる。1つは、英語による干渉である。明治初期から日本語を習得した欧米系島民の母語は英語であった。19世紀末に欧米系のほとんどがバイリンガルになったあとも、家庭で最初にならう言語（母語、第一言語）は英語であった。英語圏の話者が日本語を習得す

る際、高低のピッチを習得することはさほど困難ではない。しかし、どの単語がどの類に属するかは単語ごとに暗記するしかないため、単語アクセントが結果的に無型アクセントになることが多い。2つ目は、八丈方言による影響である。19世紀から20世紀初頭にかけて、八丈島出身の開拓者（一世）及びその子孫が島の日系コミュニティの大部分を占めていた。そのため、当時の欧米系島民にとって<話ことばとしての日本語＝八丈方言的な日本語>と言っても過言ではない。現在でも、高年層・中年層の欧米系島民の日本語には八丈方言の文法事項や個別語彙が多く含まれている。このように戦前世代の欧米系島民（中には東京式アクセントを獲得した個人はいるが）多くは無アクセントの日本語を話している。欧米系島民は英語と八丈方言のダブルパンチによって無アクセントになったと考えられる。無アクセントは米軍時代も続いた。

若年層の欧米系島民はほぼ東京式アクセントで話している。米軍統治下の小笠原に住んでいたのは百数十人の欧米島民と数十人の米軍とその家族であった。返還後には、四半世紀の間内地（多くは関東や東海地方）で暮らしていた旧島民が戻り、また新島民が大勢住み着いたのである。この中には、東京都の職員や関東地方の企業の転勤で来島した人が多かった。返還後の小笠原の小・中・高の学校に通う生徒の多くはこうした移住者であり、またそうした親を持つ島生まれの二世であった。出身地域から考えると、彼らの多くは有型アクセント、特に東京式アクセントの使用者である。返還後の欧米系の子供はこうして東京式アクセントを使う仲間（および内地から来た先生）に囲まれて生活してきた。彼らが親のアクセント（無型）ではなく東京式になっている原因は、このように面と向かって日常的に会話すること、つまり言語接触にあると考えられるのである。

## 謝辞

この研究は、2007年度首都大学東京の傾斜的研究費「特徴ある学外・体験型教育プログラム開発・実施のための全学的研究：伊豆大島を拠点として」（渡邊欣雄代表）の一環として行なわれた。調査者は次の12人（順不同）。新井正人、下川明日美、血脇洗寿、磯野英治、塚原佑紀、保坂希美、今村圭介、横川直子、唐川恵美子、中島千明、中川幸士、ダニエル・ロング。なお、調査に協力してくださった小笠原島民に深く感謝いたします。

## 文 献

- 阿部 新（2006）：『小笠原諸島における日本語の方言接触』（小笠原シリーズ4）南方新社、319p.
- 秋永一枝（1985）：共通語のアクセント。『日本語発音アクセント辞典』日本放送出版協

- 会、pp.45-90.
- 有馬敏行（1985）：返還直後の小笠原住民（特に小・中学生及び青年）のことばの実態。音声の研究、Vol.21, pp.409-417.
- 平山輝男（1941）：豆南諸島のアクセントとその境界。音声学協会会報、Nos.67-68, pp.1-5.
- 堀口純子（1980）：筑波研究学園都市における新旧住民の交流とアクセント。『文藝言語研究 言語篇』5 筑波大学文芸・言語学系、pp.71-101.
- 堀口純子（1981）：無アクセント地域における親と子のアクセント。『文藝言語研究 言語篇』6 筑波大学文芸・言語学系、pp.167-198.
- 堀口純子（1982）：筑波研究学園都市における新旧住民の交流とアクセント（2）。『文藝言語研究 言語篇』7 筑波大学文芸・言語学系、pp.127-145.
- ロング、ダニエル編（2002）：『小笠原学ことはじめ』南方新社、334p.
- ロング、ダニエル・橋本直幸編（2005）：『小笠原ことばしゃべる辞典』南方新社、364p.
- Long, Daniel (2007) : *English on the Bonin (Ogasawara) Islands*. Duke University Press. 255p.
- 馬瀬良雄（1980）：言語形成に及ばずテレビおよび都市の言語の影響。国語学、Vol.125, pp.1-19.
- 中条 修（1989）：『日本語の音韻とアクセント』勁草書房、141p.
- 大西拓一郎（1992）：方言アクセントの現在 仙台市方言におけるアクセントの獲得を中心に。日本語学、Vol.11, pp.98-113.
- 佐藤亮一（1999）：社会方言としてのアクセント 世代差を中心に。日本語学、Vol.18, pp.244-256.
- 徳川宗賢（1981）：『日本語の世界8 言葉・西と東』中央公論社、338p.